

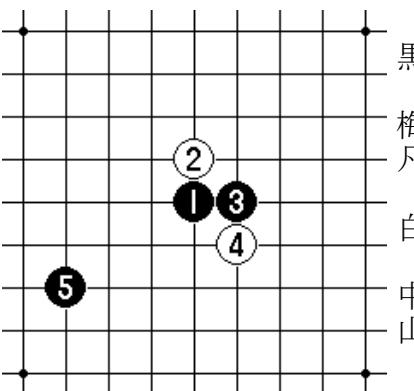
## 連珠つておもしろい

● 第134回 ●  
九段 河村典彦

今年の世界戦は稀に見る激戦だった。優勝スコアが7.5ポイントというのもかなり低い、それが4名も出たというのは記憶にない。前回は優勝の芦海は8.5ポイントだつたし、その前は曹冬の9ポイントであつた。(ちなみに、私が優勝した95年は9ポイントだつた)理由の一つには今回から五珠交替が導入されたことがあるだろう。また、これに絡むが、A Iで研究していることも後押ししている。ある程度の形まで互角に行くので、満局になりやすく、勝負がつきにくいという傾向がある。

ところが、終盤に来ると星勘定がややこしく、全員

何と言つてもまずはこの黒5！だろう。ここまで離れる例はあまりない。一路右ならよくあるのだが、思わず「何？」と目を疑つた。ただ、もともと白4の桂馬バサミは防ぎ重視なので、すぐに勝つことはない。打たれた中山君も戸惑つたことだろう。ここは当然相

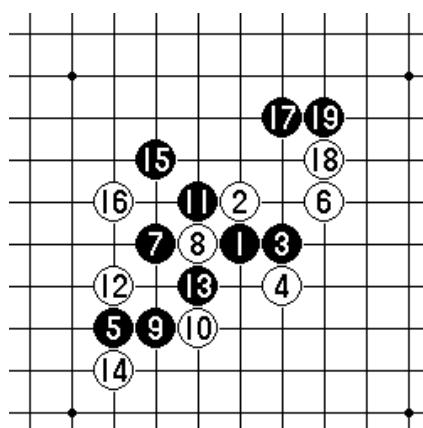


入り乱れての打ち合いとなつた。これは見ていた方にとつては面白かつた。

今回は特に中国選手が積極的な作戦を使つていた。

その中から何局か紹介しよ。

ところが、結果は黒19まであつけなく黒勝ちとなつてゐる。黒7、9が素晴らしいコンビネーションで、白は10、12と防ぎに行かなければならなくなつてゐる。こういう勝ちは満足度が高い。もしメイファンが優勝していれば、本局がもつとクローズアップされたであろう。逆に、中山君としては本局の負けを引きずらなかつたのが良かった。一応白は6、8が良く見

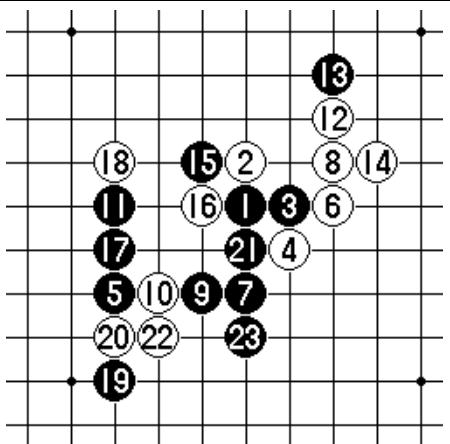


手は研究しているだろうから、それを外す方針もあり、難しい選択を迫られた。

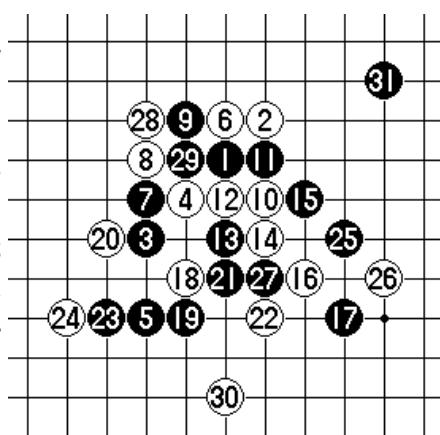
黒 梅凡 白 神谷

今回彗星、遊星はあまり打たれなかつた。五珠交替になつて可能性が大きく広がつたが、まだそこまでは行きついていないようだ。

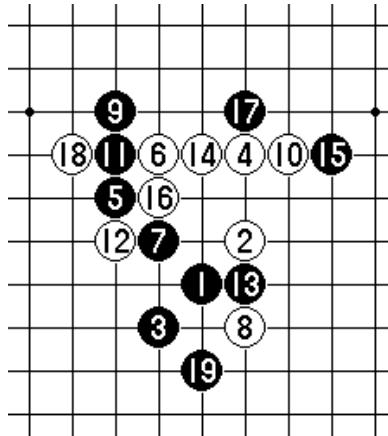
彗星長星共通で黒5は私が名人戦2次予選でも打つた手で、互角形として認識さ



れている。白18は私がその時井上君に打たれた手なのだが、神谷名人はこれを採用した。ここからの黒の打ち方がうまかつた。黒21から下辺を処理した後、どこに展開すると思ったのだが何と黒31！という手をひねり出した。しかもこの手はソフトの最善手とも一致している。こういう手はなかなか発想にない。この手で黒勝ちと言う訳ではないが、その後神谷名人が受け間違え黒勝ちとなつた。梅凡はこの2局を勝つて一気に上位に進出したが、

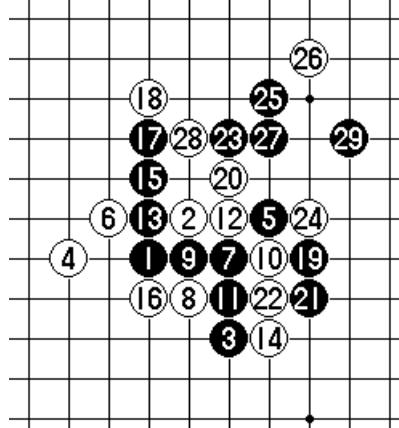


が、黒5、白6の展開は目  
が回る。こういう手を研究  
されていたらもう負けたと  
思つてしまふ。岡部君はそ  
れでもよく耐えて頑張つた  
が、黒19の対応を間違えて  
黒勝ちとなつた。それにし  
ても、この19もソフトでは  
最善手で、こんなところま  
で事前に調べられていたと  
したらとてもかなわない、



前半の負けが響いて2位止まりだった。

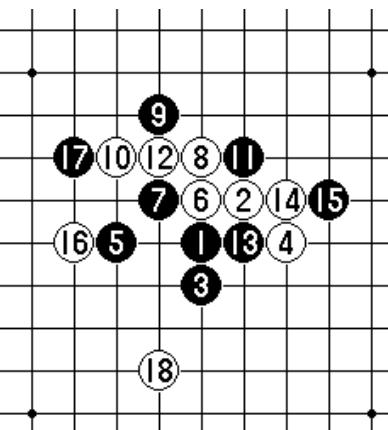
白6は当然で、その後の防ぎも特に間違つていないと思われるのだが、黒25で黒勝ちとなつてゐる。こうなると黒5に白を取つたの



と思つてしまふ。中国は今後こう言う手をどんどん開発してくるだろうから、日本も対抗策を考えしていく必要がある。

次は中国同士の一戦。黒が曹冬、白が芦海である。Cao はいつもいろんな作戦を披露してくれるが、この白 4 黒 5 も独創的だ。中国同士だがおそらく Cao 独自の作戦と想像している。

満局でも優勝の二一は当然負けない作戦を打つてくるだろうと予測し、満局に近い黒17までに白18と勝負手を放った。この手はどこも止めていないという不思議な一手である。しかし、その後の黒は手が伸びず、白が見事に打ち取つた。この結果勝ち点7.5で4名が並んだが、勝ちポイント差で中山君の優勝となつた。



が敗着とも考えられ、恐ろしい作戦であった。